

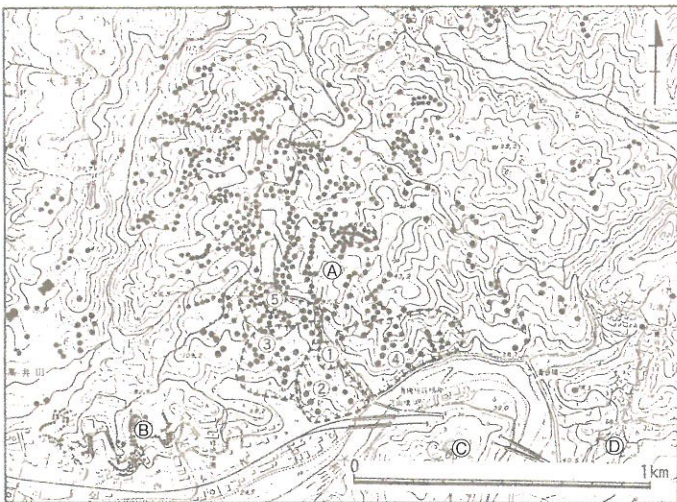
本校周辺の
歴史的環境



平尾山古墳群内の墳丘と石室を破壊された古墳



平尾山古墳群内の破壊された古墳の石材



平尾山古墳群 破壊経過図 (①→⑤)

本校の位置 (①・③・⑤)

①平尾山古墳群 ②高井田横穴群 ③芝山 ④竹原井頓宮跡 (青谷遺跡)

1. 本校の位置とその建設に至る経過 —古墳を破壊してつくられた学校—
本校は生駒山地の南端に位置し、南に大和川が流れている。本校建設以前、本館の北側から南方のグランド側、さらには大和川に向けて大きな尾根が伸びていた。

この地は古墳時代後期(約1450年前)の大型群集墳として、全国的に有名な「平尾山古墳群」の南方部にあたる。古墳群の範囲は東西約1km、南北約1.3kmで、古墳は標高約40~230mに分布している。6世紀前半~7世紀後半にかけて築造された古墳が約250基あり、ほとんどが花崗岩を架構した横穴式石室を内部にもつ円墳である。また群内には、いわゆる終末期古墳とよばれる、特異な構造をもつ横口式石槨も数基含まれている。

これらの多くの古墳がブドウ畑や雑木林のもとで極めて良好な状態(美しい自然環境に包まれたかたち)で保存されてきた。

平尾山古墳群は、古代有力氏族の物部氏や渡来系氏族の墳墓群であろうと推定され、40年以上前から筆者をはじめ研究者が分布調査を実施し、その重要性を広く訴え、全域保存の必要性を働きかけてきた。

しかし、1969(昭和44)年以降、急速な採土工事において、ダイナマイト爆破やブルドーザーによって約50~100基の古墳が次々と破壊された。この間、大阪府や柏原市による発掘調査は行われず、横穴式石室の石材が各所に散乱した状態であった。工事後、跡地は建設会社社に転売され、最後に大阪府の所有となり、この地に本校が建設されたわけである。

2. 本校周辺は歴史の宝庫 —歴史的文化財がいっぱい—

(1) 古墳時代

本校の正門・プールのすぐ北斜面上に古墳がある。平尾山古墳群内の古墳である。さらに北方柏原市域一帯に古墳群が広がっている。これらを総称して「堅上・堅下古墳群」という。古墳総数は1500基をこえるであろう。ほとんどが古墳時代後期のものであるが、これらと同時期に造営された高井田横穴群が本校の西方、J R高井田駅の北側丘陵上にある。これは平尾山古墳群内の古墳のように花崗岩を積み上げたものではなく、凝灰岩層を掘りくぼめて、200基以上の横穴をつくり、遺体を埋葬する施設としたものである。いくつ

つかの横穴が宅地造成のために破壊されたが国史跡に指定、史跡公園として整備され柏原市立歴史資料館も建設(館内には、市内の遺跡からの出土品や大和川付け替え関係の史料も展示)されている。

高井田横穴群内の30数基の横穴に、馬や船にのる人物などの線刻画を描いている。同様の横穴群は西南方の玉手山丘陵北寄りの安福寺横穴群・玉手山東横穴群などがある。これらは、古代有力氏族の太(多)氏、あるいは土師氏や渡来系氏族の同族集団の墳墓群と推定される。

横穴式石室と横穴の被葬者・築造者集団の間に階層や氏族による相違がみられるのではないかと考えることもできる。また高井田横穴群内の高井田山古墳は、特異な遺物を出土し、古い時期の横穴式石室として、横穴群の被葬者との関連を再検討する必要がある。

これらよりも古い時期の古墳群が松岳山古墳群(国史跡。本校の南、大和川を隔てた松岳山丘陵上)と玉手山古墳群(近鉄国分駅の西方、玉手山丘陵上)である。いずれも古墳時代前期(約1650年前)の前方後円墳をもつ有名な古墳群として全国的に知られている。これらの古墳群は、「倭(大和・ヤマト)政権」が河内への進出のため河内の出入口に造営されたもの、あるいはいわゆる

「河内政権」の基盤となった有力氏族の首長たちの墳墓群と推定される。つまりこの周辺に渡来系氏族をはじめ有力氏族が配置され、政治・文化面でも地域支配を推進した重要な地域であったことがわかる。

(2) 奈良時代

飛鳥～奈良時代、大和と難波を結ぶ中間地点として、国分・高井田付近は重要であった。中国・朝鮮の文化を受け入れるための大和の玄関口であり、遣隋使や遣唐使たちが通行した地点に近かったからである。

次に『続日本紀』や『万葉集』などの史料から当時のこの地の様子をながめてみることにしよう。

大和国平城宮（奈良市）から摂津国難波宮（大阪市）への、天皇の行幸などの往還ルートにあたる河内国で一泊するために造営されたのが、『続日本紀』にみえる竹原井頓宮（たかはらいのかりのみや・柏原市青谷）である。この地は、大和川をのぞむ景勝地であり、発掘調査によって建物跡が確認されている。さらに『万葉集』に記された「岡辺の道」は「竜田道（越）」のことであり、「島山」は「芝山」をさすものと考えられ、古くから多くの人々が当地を往還し、注目された地域であったことが理解される。

竜田道からは「河内大橋」（『万葉集』に記された赤く塗られた橋で、「古大和川」上流に架かっていたと考えられる）を渡り、河内国の中心、河内国府（藤井寺市）にも行くことができ、北流する古大和川の堤防上の道「渋河路」を通り、難波に至ることもできた交通の要地である。

奈良時代の聖武天皇の皇后、光明皇后は古代の有力氏族の田辺氏と深いつながりをもつ。田辺氏の氏寺、田辺廃寺（柏原市田辺）には瓦積と埴積基壇をもつ三重塔が二基あった。田辺廃寺の東方、本校の南方には七重塔を有する河内国分寺（柏原市国分東条町）が、その近くに国分尼寺もあった。“国分”の地名はこれに由来する。

聖武天皇と光明皇后の子、孝謙（称徳）天皇は、『続日本紀』にみえる智識寺南行宮（『万葉集』には河内離宮と記されている。柏原市安堂）の造営と、のちには歴史上著名な弓削道鏡（ゆげのどうきょう）との関係のなかで弓削宮（由義宮、八尾市）の造営にかかるが、称徳天皇の死後、道鏡の失脚によって未完のまま放棄されたと考えられる。

柏原市域の生駒山地南端西麓に建立されたという「河内六寺」は、南から鳥坂寺（柏原市高井田）・家原寺（安堂）・智識寺（太平寺）・山下寺（大県）・大里寺（大県）・三宅寺（平野）で、これらの寺々を聖武天皇・光明皇后・孝謙（称徳）天皇らが参拝したことが『続日本紀』からわかる。天皇の病氣平癒や国家安泰を願ったという。

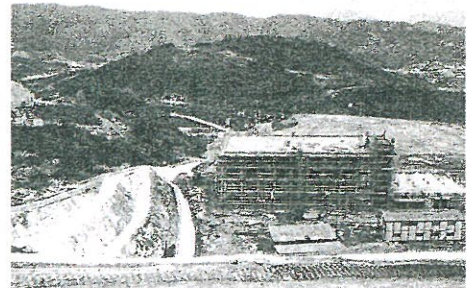
のちに東大寺大仏造立にいたる聖武天皇らが智識寺にあった塑像（そぞう・木心に粘土を重ねて造られた像）を見て、銅造による大仏造立を発願したといわれている。

いずれにしても、この地が政治・宗教・文化の先進地として着目された地域であり、ここに多くの渡来系氏族や僧侶・民衆が居住し、活躍していたことを忘れてはならない。

河内六寺が、のちに『伊勢物語』などに語られる在原業平の伝承をもつ業平道に沿って建立されており、並行して南北に伸びる東高野街道（京街道ともいう。旧170号線）と、今も地元の人々の信仰を集め、生駒山地西麓部に点々と分布する多くの古い神社（式内社）の存在は、見逃せないものである。

本校とその周辺には文化財が数多く、歴史的環境と美しい自然環境にめぐまれている。我々は、そのような環境に包まれながら、それらの保存と活用をめざして、これからの生活を真剣に考えていかねばならない。

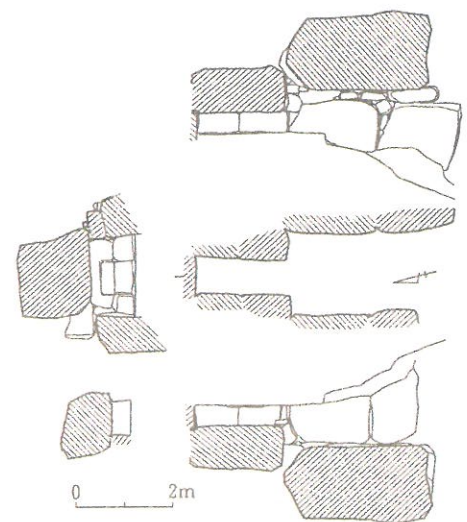
（社会科 吉岡 哲）



古墳を破壊したあとに建てられた本校（北から）
後方に芝山がみえる



平尾山古墳群の横口式石槨（平尾山102号墳）



平尾山古墳群内の横口式石槨実測図（平尾山102号墳）

24期生修学旅行（北海道富良野体験学習）

24期生修学旅行担当 松本 亮



24期生の学年団は、2月に結成されるやすぐに修学旅行の検討に入ったが、「生徒たちに今まで体験したことがなく、これからも減多に体験することがないかも知れないことを体験させてあげたい」という気持ちが一つになったのか、北海道富良野での体験学習を行うことで意見がまとまった。しかし、長い間信州でのスキー修学旅行が慣例であったため、職員会議では長時間の議論がなされ、産みの苦しみを味わっての船出となった。

しかし、入学してきた24期生たちに告げたと、生徒たちの期待感は大変大きく、「俺、修学旅行に行くためにがんばって進級する」と言う生徒もいたぐらいである（残念ながらこの生徒は1年途中で退学したが）。

このような声を励みに係の者はプラン作りに努力したが、何分初めてのこと故誰にもノウハウがなく、似たような修学旅行を行った学校から資料をいただくなどして進めていった。2回にわたって行った下見も、息つく暇もなくあちこちを見て回り、ホテルに戻る頃には、ぐったりとなっていた。

生徒たちもよく頑張っていて着々と準備を整えてくれた。2年生春の遠足では本番に備えて関西空港に集合。修学旅行新聞を定期的に発行しての情報の提供と雰囲気作り。全体レクの計画。修学旅行前の文化祭では北海道をテーマに各クラスが趣向を凝らした催し物を行った。

このような長い道のりを経てようやく明日から本番となったとき、正に目の前に暗雲が垂れ込めた。富良野の天気予報は3日も雨だったのである。「これでは本来味あわせてあげられる半分の楽しみもないかも知れない」と暗い気持ちのまま運を天に任せて眠りについた。

しかし、天気の様は我々を見捨てなかった。晴天とまではいかないが、何とか3日間持ちこたえてくれ、生徒たちは様々な体験を大いに楽しんだ。

初日は観光（というより土産購入？）に走り回った小樽。2日目は全員でのラフティング（10月下旬の冷たい水にもかかわらず多くの生徒が歓声を上げながら川に飛び込んだ）、希望したグループでの乗馬、カヌー、釣りなど。最終日は富良野の丘をサイクリングとハイキング。2泊3日の短い期間ではあったが、そこにぎゅっと楽しみを詰め込み、ほとんどの生徒たちが「もっといたい」と言った。

この修学旅行の中でうれしい驚きがいくつかあった。一つは初日の関西空港での集合で、朝7時30分という早い時間にもかかわらず、一人を除いて全員が時間内に集合を完了した（この一人も天王寺を出たところから「駅に忘れ物をした」と悲壮な声で電話をしてきた）。

二つ目は、一人の生徒もホテルに残ったり、見学することなく、体験学習に参加したことである。風邪を引いて微熱がある生徒でさえ、「行かせてくれ」と懇願して出かけた（おかげで看護婦さんは「こんな暇な修学旅行は初めてだ」と言っておられた）。

この修学旅行を通じて生徒たちが貴重な体験をし、団体行動を始め様々なことを学んでくれたことが、私たちの最大の喜びであった。



26期生スキー修学旅行について

26期生修学旅行担当 浅井 和子

毎年のごとくが修学旅行については、入学式の1ヶ月以上も前、学年団の顔合わせもそこそこに内容と行く先を決めねばならない。生徒の顔を見た後、できれば生徒の希望も反映させて決めるというわけにはいかないものだろうか。

26期生の出発当初、学年団で話し合った際、「わらび座」と「スキー」の二つの意見が出て、なかなか決着がつかなかった。数回の話し合いを経て、最終的には僅差でスキーに決まった。本校も修学旅行の内容を見直す時期に入ると実感し、スキーに行くのは26期生が最後かも知れないとふと思ったりした。

とはいえ、スキー修学旅行には捨てがたい魅力が幾つかある。スキー講習では、少人数の班にベテランのインストラクターが付き、丁寧に指導する。そのため、参加した生徒全員がスキーの腕を上げることができ、他にない達成感を味わえる。また、学年レク・クラスレクという催しで、学年全体・クラス全体の親睦も図れる。そうした催しのための話し合い・準備で、HR運営委員（リーダー）の力を養成することもできる。

行き先については、信州か北海道か、意見は二つに集約された。24期生からの流れで、「北海道」という魅力ある候補地を捨て去ることができず、北海道の富良野に決まった。

ただし、「北海道」には難点が幾つかあった。まず食事はバイキング以外の応用が利かず、しかもまずいこと（これは25期生からの情報）、そして遠方である（よって飛行機とバスでの遠距離移動となる）こと。まず夕食の内容と形態について、旅行会社・ホテルとの交渉を早くから始めた。これは旅行会社の担当者を変替させるほどの厳しい交渉になった。その結果、バイキングとセットメニューの折衷案で落ち着き、直前下見で最終チェックの味見もしたが、修学旅行本番での夕食は評判が良くなかった。この点については今も総務としての責任を感じるし、悔しく残念に思う。

一方、クラス毎にデザインしたオリジナルのトレーナー作りや学年レク・クラスレクの事前準備は順調に進み、生徒達は北海道で滑るスキーを本当に楽しみにしていた。「楽しまなければ損だ!」というような熱い期待が生徒側にあった。「修学旅行、楽しみ!」という声を幾つも聞いた。私も、下見で知った北の大地独特の美しい雪とゲレンデの雄大さに感動していた。山並みが眼前に迫る眺望の良いゲレンデに、さらさらとした粒子の細かい純白の雪。ゲレンデがホテルから近いのもよかった。

そしていよいよ本番の2月29日がやってきた。209名が参加した。この参加率の高さはうれしい驚きだった。残念ながら現地は曇天続きで寒く、ゲレンデからの見晴らしも今ひとつだったが、生徒たちはスキー講習を心から楽しんだ。毎回の班も集合時間より早めに集まって、みんな意欲的に滑った。2名の病人が出た以外は、けが人も、講習を渋るなどだだをこねる者も出なかった。

クラス毎のレクは、リーダーが中心になって大いに盛り上がった。学年レクの雪上運動会では、厳しい寒さの中、HR運営委員の懸命な司会進行を受け、心からゲームを楽しもうとする生徒たちの前向きな思いが全面に出ていた。

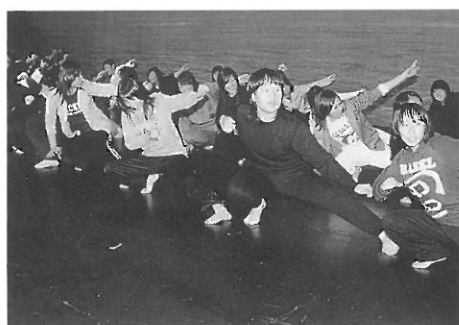
私自身、22期生で信州のスキー修学旅行を経験したが、その時を上回る生徒たちの動きを目の当たりにして、本当に頼もしく思った。残念なことに、豪雪のため、最終日は講習を早く切り上げ、迂回路を通して帰途につくことになったが、生徒達とはとっさの変更にも機敏によく対応した。

教員側も、連日、深夜に渡る打ち合わせを行って、翌日の流れを検討した。反省点や残念な点は幾つかあったが、一つの事故もなく充実した修学旅行を送れたのは、生徒の熱い思いと教員の真剣な気持ちが一致したからだと思う。



27期生修学旅行 東北(わらび座)の思い出

27期生修学旅行担当 白浜 治作



3階の職員室にいた時、前の教室から「白浜やる！」って、大きな声が聞こえた。何事かと思って廊下に顔を出すと、先生から「ちょっと」と呼ばれて教室に入った。「なんで、東北やねん！」「修学旅行でなんでソーラン節踊らなあかんねん！」「去年北海道やったんちゃうの！」生徒達の怒号が響いた。

私は、心の中で「しめたっ」と思った。予想通りの反応だ。私にとっては、2度目のわらび座修学旅行だ。自信があった。同じような不満を露わにしていたあの13期生が、帰りに私の手を取り「先生、こんな素晴らしい修学旅行をありがとう」って涙しながら語った。

「君たちは、きっと感謝するよ」って言った。生徒はキョトン、私はニコニコ。生徒たちが修学旅行の行き先を知った瞬間の出来事であった。

しかし、私の心の中には自信と共に、不安もあった。前回はスキーとソーラン節の2本立てで実行し、大成功であったのだが、今回は農作業体験とソーラン節である。ソーラン節は今のヤング向けにモダンに改良された振付であると聞くが大丈夫か？農作業体験にいたっては全く初めての経験であり、生徒に感動を与えることができるのか？素晴らしいという噂は聞いてはいるが不安である。

案ずるより生むが易し。27期生というより今の高校生の環境に対する順応性には驚愕に値する。10月下旬という時期で主だった農作業はりんごの葉摘みとか苗箱の移動とか地味な仕事であったが、朝早くから農家に入り込み貴重な労働力として夜7時ごろまで農家で生活し、「お父さん」「お母さん」と言って夕食の団欒の一時を過ごし、帰りにはたくさんのお土産をもらい、バスの中から目にいっぱい涙をためて一生懸命手を振って別れを惜んでいる姿に私は涙した。普段通りで特別な食事の準備はしないという約束のもとであったが、ほとんどの生徒が「食事がおいしかった。特にご飯がおいしかった」と第一の感想で述べていることについて、意外であり、なるほどと感じ、また、感動した。

ソーラン節はすでに経験済みであり、精神的に余裕を持って見守ることができた。若者向けに改良されたソーラン節はきびきびした動きでかっこよく生徒はのりによって練習し発表会に望んだ。クラスの団結、集団としての達成感を存分に経験した素晴らしい発表会であった。最後に歌った「輝け！君の命」は14年前を思い出して一人、深く感動した。

最終日の前日、新潟県で大きな地震があった。あの「新潟中越地震」である。日本海側の在来線が不通である。明日乗る予定の夜行列車が運休するかも知れない。夜、緊急ミーティングが開かれた。この時点では先の読める情報は何もない。とりあえず、予定通り十和田湖を回り、メインランドからJR大館駅まで行ってみる。運転再開しているかも知れない。いや、仮に再開していたとしても余震の影響で危険である。今から切符が取れるかどうかかわからないが、午前中、小岩井農場を見学した後、JR盛岡より、東北新幹線、東海道新幹線を乗り継いで明日中には大阪に帰るべきである。結果は後者を選ぶことになった。心配は急であったため、生徒の座席がとびとびであり、一般の客と混在する形になったことである。しかし、ここでまた私は感動させられた。生徒はけなげにも指導に完璧に従い、整然と行動し、何のトラブルもなく大阪に帰ったのである。教室で「白浜やる！」って大声を出していた生徒がわらび座を出るとき、私のところに来て「先生、ありがとう」って言った。私は、声が出ずうなずきだけだった。それから、月日がたった。27期生3年次、体育祭でみんながソーラン節を踊った。先生がテープを間違えた。一瞬どよめいた。先生が職員室に走った。あの生徒が「人間だれしも間違えることがある。しずかに待とう」って言った。少し、遅れてソーラン節がスタートした。顔を見られるのが嫌で、遠く陰からじっと見た。

文化祭で「輝け！君の命」をみんなで歌った。ちょっと練習不足だった。声が小さかった。しかし、私の心は満たされていた。

今思う。わらび座の逆転のドラマは健在である。

28期生修学旅行

28期生修学旅行担当 角谷 修治

28期生の修学旅行は、本校では初めての沖縄への修学旅行を平成17年2月28日(火)～平成17年3月3日(金)の3泊4日で実施した。沖縄の歴史を学び、平和に対する意識を高め、沖縄の自然に触れながら、沖縄固有の文化を学ぶことを目的とした。

2月28日。伊丹空港から那覇空港へ。沖縄は晴れ渡り、汗ばむ陽気であった。沖縄到着後すぐに4グループに分かれ、平和学習を行う。ひめゆり平和資料館、平和の礎、糸数壕の見学等を行った。特に糸数壕では、ガイドの方の説明に強い衝撃を受けた生徒が数多くいた。各グループが平和学習を終えホテルへ。ホテルの部屋は清潔でゆったり広く、生徒たちの満足そうな様子が伺えた。夕食はバイキングで楽しそうに会話しながらお腹いっぱい食べ、満足そうであった。

2日目。当初の予定では2グループに分かれ、マリンスポーツと沖縄の文化体験を行う予定であったが風が強く、マリンスポーツは中止となった。急遽、マリンスポーツの代わりに、3日目に行く予定であった沖縄海洋博公園見学と沖縄の文化体験を行った。沖縄の文化体験では、各々が楽しそうにいろいろな体験を行った。また、沖縄海洋博公園では美ら海水族館の見学を中心に行った。巨大水槽に泳ぐジンベイザメとマンタの繰り広げるショーに、生徒たちは感動していた。また、偶然ではあったが、ジンベイザメに餌をやる場面にも遭遇し、その豪快さにまた感動していた。ホテルへ戻って夕食。この日もお腹いっぱい食べ、満足げな様子であった。夕食後、全体レクリエーションが行われた。クラス対抗形式で行われ、教員チームの参加もあり大いに盛り上がった。

3日目。当初の予定では、午前中は沖縄の食文化の体験を行い、午後から沖縄海洋博公園で美ら海水族館の見学を行う予定であった。ただ、前日にマリンスポーツの体験が出来なかったため、天候が良ければマリンスポーツを実施する予定であったが、この日も風が強くマリンスポーツは中止となった。午前中は予定通り沖縄の食文化の体験を行った。自分たちで作った沖縄の伝統的なお菓子を楽しそうに頬張っていたのが印象的であった。午後からは予定を変更し、沖縄の古い民家を移築した琉球村へと向かった。ここでも沖縄の文化に触れ、充実した時間を過ごした。琉球村を後にし、道の駅かでなに向かう。道の駅かでなの展望台からは、米軍の嘉手納基地が一望でき、その広さに驚くとともに爆音をたて飛び立つ戦闘機にも驚きを覚えていた。驚きの余韻を残しながら沖縄の若者に最も人気のあるスポット、アメリカンビレッジに向かった。生徒たちが喜びそうな服や小物が沢山揃い、ショッピングを満喫しホテルへ。夕食後、クラスごとにレクリエーションが行われた。各クラス工夫を凝らし、盛り上がりを見せていた。

最終日。この日も予定を変更し、グラスボートに乗り海中観察を行う。グラスボートが魚の餌付けされているポイントに着くと海面に魚が群れ、生徒たちから大歓声が起こる。ただ、少し波が高かったため酔いした生徒が多く、下船後のバスへの乗り込みが少し遅れるという場面もあった。今回の修学旅行の行程には入っていなかったが、時間的余裕が生まれたのでピオスの丘へと向かう。人工的に亜熱帯の動植物を集めたテーマパークではあるが、大変広く見応えのある場所であった。特に園内を船で回りながら説明するガイドさんの話がユニークで笑いの渦であった。ピオスの丘を後にし、一路那覇へ。那覇市内に入り昼食とお土産の購入を済ませ、那覇空港へ。那覇空港から関西空港までのフライト中は、疲れのためか寝ている者が多かった。事故もなく全員元気に帰阪し、無事解散。

天候の影響で毎日のように予定変更することになった修学旅行ではあったが、生徒たちは機敏に行動し、充実した修学旅行となった。

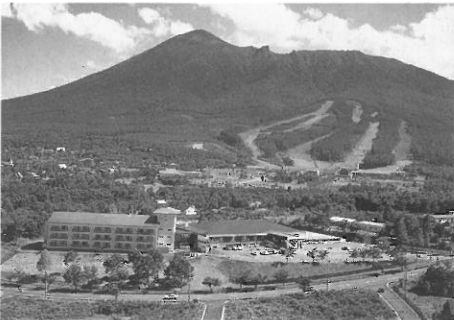


29期生の修学旅行に寄せて

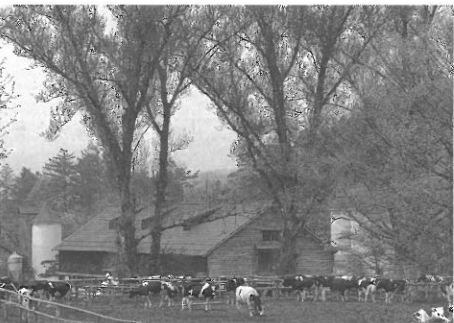
29期生修学旅行担当 坂井 よし江



農業農家体験



美しい自然八幡平にある宿泊ホテル



岩手山の南麓に広がる小岩井農場



中尊寺

関西に住む人間にとって東北は遠い。その遠い岩手県を29期生は修学旅行の地とした。岩手県胆沢郡の衣川、前沢、胆沢。平成18年2月に町村合併し、奥州市となったこれらの地域は、日本の原型を残す農村地帯である。稲刈りを終えた田。収穫を迎えるキャベツ、大根。摘み取られるのを待つりんどうの花。これらの集落で大地に根を張り生活をしている農家のおじいちゃん、おばあちゃん。若夫婦に孫たち。29期生は、この大地の中で、これら暖かい人々に囲まれて農村体験をする。共に働き、共に食し、共に語らい、大地の中で生きるとはどういうことか、人の中で生きるとはいかなることか、労働の喜びとはどのようなものか、僅か2日間ではあるが、心と身体で感じ取りたい。又、この地帯は「星空日本一」にも選ばれた場所でもある。大阪では決して見ることのできない満天の星空を、こんな美しい空の下で自分達は生きているんだ、という思いと共にうっとり眺めよう。

さらに、この地にはNHKの大河ドラマでブームとなった、かの源義経の終焉の地、平泉がある。奥州藤原氏の栄華を伝える中尊寺金色堂を見学し、九百数十年前に都から遠く離れたこの奥深い奥州の地に、どのような文化が開花していたのかも、しっかり見てきたい。高校1年生で学んだ『奥の細道』の旅でこの地を訪れた芭蕉の足跡もたどってみたい。

3日目。修学旅行は平泉を離れ、宮澤賢治の描いた『なめとこ山』を横目に見つつ東北自動車道を北へ向かい岩手山の麓、小岩井農場で遊ぶ。チーズや牛乳等、全国的に有名となった小岩井農場は丁度ハロウィーンのカボチャで飾り付けられている。各農家に分かれていた友人達と、この雄大な自然の中で語り合おう。

小岩井農場の後は、再びバスに乗り、秋の紅葉の美しい八幡平へと移動する。八幡平では各々スポーツ体験文化体験を楽しみたい。ある者はパラグライダーで風のにり、ある者は色付いた木々に囲まれゴルフコースを回る。又、本格的なサーキットコースでカートに乗り、体感速度1.5倍～2倍といわれるスピードを経験する者もいる。半日ゆっくり釣り糸を垂れて、イワナやニジマス釣り、その場で釣った魚を焼いて舌鼓をうつ者もいるだろう。他にもマウンテンバイクやマウンテンボード、地熱を利用した染め物体験や陶芸など種々なプログラムを楽しむことができる。

八幡平のホテルでは、学年全員が初めて一斉に会食となる。奥州市の各家庭で食べた郷土料理とは、また違った地元の味も楽しむことができるだろう。その後はレクリエーション。時間的には短いけれど、各クラスで知恵を絞り、協力し合い、大いに笑い合おう。

4日目夕刻、仙台空港から伊丹空港へ帰途につく。なかなか個人では訪れる機会のない東北の、今しかできなかった多くの思い出を胸に、なごりを惜しみつつ、元気で戻ってこれるような、すばらしい修学旅行となることを願っている。

(本稿は修学旅行実施前に記しました。)

現在の柏原東



体育祭のさらなる発展を

植松 健一郎

私が本校に赴任した年に、印象に残っている出来事がある。その年の体育祭当日、私は警備の当番に当たっていて、体育祭が最高潮に達した頃、生徒指導室に詰めていた。運動場から遠く離れたその部屋にも、おおきなうねりのように運動場の興奮が伝わってきた。その時、一緒に詰めていた先生が、「ああ、いい体育祭や。こんな体育祭できるんやったら、もうしばらく（この学校に）おってもええなあ。」と何度もつぶやいておられた。その様子が強い印象として残った。ほぼ10年前、17期生が3年生の年であった。

その体育祭をさらに充実したものにしてと改革に乗り出したのが、外村部長の2年目、19期生3年生の年であった。改革の柱は二つ。応援スタンドを設営することと、縦割りの取り組みを強化するというものであった。

それまでの体育祭は、応援合戦やマスゲームには一生懸命に取り組むが、肝心の競技には熱が入らなかった。走る競技はおとなしい子が押しつけられたり、ふざけて走る者がいたりした。出番のない生徒の中には、運動場のフェンス下に数珠繫ぎに座っている者が数多くいた。それを競技にも真剣に取り組む体育祭に、総合優勝目指して連合が団結し、競技中も仲間に声援を送る体育祭にしたいというのが目標であった。

また、現在と同じように連合は組んでいたが、実質は各学年に丸投げで、看板は2年生、旗は1年生というように学年分担制になっていた。これでは連合に対する思い入れも希薄で、総合優勝を目指して懸命になる雰囲気も生まれようがなかった。そこで、応援合戦、競技中の応援、看板、旗の四つの部門でそれぞれ3年生が指導力を発揮し、1・2年生を牽引していくような体育祭を目指した。

改革1年目、スタンド導入の効果は目に見えて現れた。それまでの体育祭より、応援席で応援する者が増えた。看板はその大きさを生かすきれいな連合もあったが、大きくなった分、迫力が増し、生徒のやる気を引き出した。前日に取り付けても夜の間に強風にあおられて倒壊する恐れも大きく減少した。一方、縦割り指導の方はすぐにはうまくいかなかった。3年生をリーダーにしたのはいいが、全部3年生がやってしまった連合があるかと思えば、頑迷に学年分担制に固執し、看板や旗の制作に3年生が全くかかわらない連合もあった。しかし、ともかくも新たな歴史に踏み出した1年であった。

改革2年目、20期生が3年生になった年、「連合虎の巻」を作り、縦割り指導をさらにすすめた。ほぼ全ての連合で、準備の段階で色の違う体操服が一緒に旗に色を塗り、看板の釘を打つ姿が見られたのがこの年であった。看板・旗の質は一気に向上した。競技中の応援にも熱が入るようになった。最大得点の入る、最後の競技「連合対抗リレー」の時、応援は最高潮に達した。声の限りに身を乗り出して応援する応援席の前を、必死の形相の選手が駆け抜けていく。

その後も、連合HRを活性化させたり、応援合戦に隊形移動を取り入れるようにしたり、体育祭をよりよいものにしてという取り組みは少しずつ進んでいった。スタンドを導入して8年目、26期生3年生の年、その成果が開いた。クラス対抗リレーが始まるや否や、スタンドでは総立ちの応援が始まった。今までは体育祭の終盤で見せていた高揚を、最初の競技からつくり上げていた。そしてそれは、いささかも衰えることなく終盤まで続いた。3年生がスタンドに不在の時も、1・2年生が引き継いだ。スタンドを導入し、縦割りを強化する方針を打ち出した時に目指した体育祭がそこにあった。

ここに至るまでの物語はこの紙面ではとうてい語りつくせない。最後に20期生で団長を務めた女子生徒がPTA新聞「柏東」に寄せた言葉でこの文章を締めくくり、柏原東高校体育祭の今後のさらなる発展を期待したい。「私らの体育祭を見て、下の子らが一人でも進級しようと思ってくれたら、私らの体育祭は成功やったと思う。」

サマー
キャンプ

サマーキャンプは、生徒会主催の新入生歓迎行事です。新入生にとっては、高校生活の楽しさを実感するとともに、クラス活動の基礎となる自主性・積極性・協調性を養う機会であり、上級生にとっては、リーダー研修の機会となっています。

かつては、『リーダー合宿』と呼ばれ、春に実施されていましたが、ここ数年は、夏休みに入ってしまう『サマーキャンプ』として定着しています。今年も、生徒会の執行部を中心とした実行委員は、新学期早々より企画を練り、飯盒炊爨・料理コンテスト・キャンプファイヤー・レクリエーションなど各種の野外活動や討議練習等の準備に、真剣に取り組まれました。生徒たちは、実行委員合宿・サマーキャンプを通じて、「自分たちが考えて行動すること」の大切さや楽しさを学んでいきます。

この経験が、クラス活動や修学旅行に生かされ、また体育祭や文化祭等の生徒会行事を支えていく大きな原動力になっています。

1995年春 大阪市立びわ湖青少年の家

1996年春 奈良市立青少年野外活動センター

1997年夏 兵庫県立兎和野高原野外活動センター

1998年春 和歌山県白崎少年自然の家

1999年春 西脇市立青年の家

2000年夏 兵庫県立兎和野高原野外活動センター

2001年夏 和歌山県立紀北青年の家

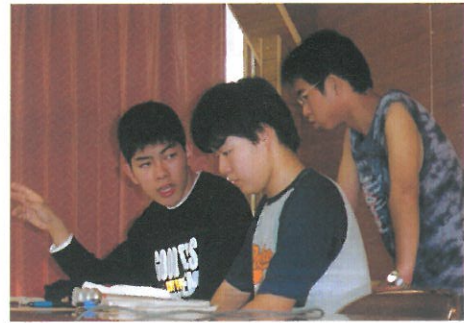
2002年夏 兵庫県加美町立青年の家

2003年夏 兵庫県加美町立青年の家

2004年夏 和歌山県立潮岬青少年の家

2005年夏 兵庫県加美町立青年の家

2006年夏 和歌山県白崎少年自然の家



討議



あまごつかみ



飯盒炊爨



キャンプファイヤー



表彰